

東海の古代

第246号 2021年2月

会長 : 竹内 強
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

狂心の渠と酒船石遺跡

一宮市 畑田 寿一

宝皇女は孝徳天皇崩御後、斉明天皇として再び即位する。そして即位の翌年（656年）、「狂心の渠」の建設に着工する。場所は飛鳥坐神社付近から香具山まで約2kmで幅10mの渠と想定されており、国土地理院の高さを強調した地勢図をみると遺跡の跡と思われる箇所を垣間見ることができる。石神神宮付近まで12kmを掘ったとする説もあるが、川を横断する運河は建設が難しく現実的では無い。



この用途は諸説あるが、飛鳥川と並行して香具山と板蓋宮を結ぶ運河の性格が強く、物資の運搬などにも有用なものであった。しかし『日本書紀』（以下、書記とする）の記述によれば、世間の評判は芳しくなく、後飛鳥岡本宮も含め10万人の民を動員して建設したが、宮は直ぐに焼き討ちに会ってしまった。

建設の背景には道教の到来があり、聖地の建設により政治の不安定と流行り病の流行から国家を救おうとしたとする説が有力であるが、この状況を総合的に分析した資料が少なく謎が多い。しかし2000年に酒船石遺跡の北側に亀形石遺跡が発掘されて状況が大きく進展した。今回は数少ない先進の資料の内、門脇禎二氏の『飛鳥と亀形石』（学生社：2002年）を参考にさせていただき、この時代の背景を眺めてみたい。

1 齊明天皇の時代の建造物

齊明天皇の時代には宮の建設に並行していろいろな土木工事や石像を造った。人々はこれを「民を無駄に動員する愚策」と称していたが、一方、各国からの訪問者を眺めてみると、国の体面を保つために必要な部分もあったと考えられる。

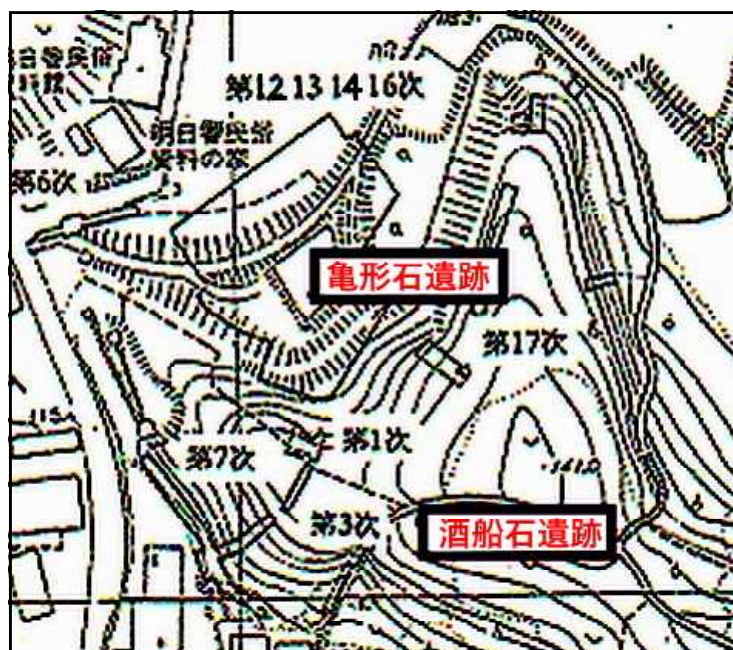
朝鮮半島の緊張が高まる中で各国と対等に対応するに必要な事でもあった。

しかし、その方法として道教に頼ったのは誤りで、人々の理解を得ることが出来ず、愚帝の評価をされることになってしまった。

年 代	出 来 事	各地からの来訪
齊明元 (655)	小墾田と、深山広谷に宮殿を造ろうとするが中止。	百済の調使150名
齊明 2 (656)	後飛鳥宮建設。造宮と狂心の土木工事。	高句麗から81名
齊明 3 (657)	飛鳥寺西の須彌山像を作り、旦に孟蘭盆会を行なう。	靑貨羅
齊明 5 (659)	天樞丘東之川上に須彌山を造る。	陸奥、越の蝦夷
齊明 6 (660)	中大兄皇子が初めて漏刻を造る。 石上池辺に須彌山を作る。	高句麗から100名 肅慎47名

今回は石の建造物の内、酒船石と亀形石を中心に取り上げてみたい。

両者の遺跡は小高い山の頂上と山麓にあり、2000年に亀形石を中心とした水遺跡が発掘されることにより話題となった。



2 酒船石遺跡



酒船石については江戸時代から謎の建造物とされ、色々な説が挙げられてきた。主なものを列記すると次のものがある。

酒船石の用途諸説	主 な 説 明
神酒を絞る	飛鳥坐神社のための酒を製造
灯油を絞る	窪みで種を擦り潰して滓を分離
宗教目的水占	水の流れる方向で占う
ゾロアスター教由来動物生贄	南方に同様の石があり、この風習が伝来
製薬（薬酒）用の石臼	薬草を擦り潰した後、酒で洗う
水銀精製	鉱石を粉碎後の沈殿処理に使う
水道浄化装置	北側の亀形石遺跡に給水
暦用天体観測	農事用の時期を決定

現在では、北側の亀形石遺跡と一体のものとする学者が多く、亀形石への水の供給装置、または一連の禊・占い設備とする意見が多い。しかし、現在のところ酒船石への給水路と亀形石との連絡水路が見つかっていないため、説として確定できていない。

少し形式は違うが出水地区にも酒船石があった。現在は京都の野村碧雲荘に移設されているので見ることはできないが、飛鳥資料館には複製が存在する。

これを見ると庭園の水遣りの一部で宗教的な匂いは無い。船酒石や亀形石もこの程度の用途であった可能性は高い。

3 亀形石遺跡



付近一帯を総合調査した「酒船石遺跡第14次調査報告書」（明日香村教育委員会2001）に拠ると亀形石遺跡は次のような経緯を経ている。

番号	時 期	出 来 事
I	7 世紀中頃	湧水遺跡は比較的低く、亀形石も現在より低い位置
II	7 世紀後半	湧水遺跡の高さを倍増、亀形石は現在の場所に移動
III	7 世紀末	周辺に敷石を敷設
IV	9 世紀	南北の溝を掘り、埋まった石畳を改修
V	9 世紀末	湧水遺跡は埋まってしまい井戸枠で代用

以上、斉明天皇の時代に始まり、約250年間に亘り使い続けられてきた。平城京に都が移っても改修が続けられていたことになる。最初は禊の場であったが、その後は歴史の記念物的存在であったと考えるのが妥当であろう。

近年、四天王寺（大阪市）の亀形石造物が亀形石と同型であるとする研究が発表された。長方形の水槽に亀形の水槽が連結され、大きさもほぼ同じである。建造は7世紀とされているが、孝徳天皇期（645－654年）の難波遷宮の時代とすると飛鳥より古い可能性がある。現在は先祖供養のために経木を水に浮かべる儀式に使われており、亀形石も出水酒船石と同様に、この程度の用途であった可能性は高い。

4 日本における道教の伝来

三角縁神獣鏡における東王西母などから、道教は日本に4世紀に伝来したと考えられているが、律令制においては呪禁師が登場して呪力が信じられるようになった。しかし組織的な伝播は無く、道教の思想の一部の神仙思想や陰陽道が取り込まれた程度に過ぎなかった。

(出典：Wikipedia「道教」の要約)

書紀の斉明天皇二年の条に、「多武峰（田身嶺）の頂上に周りを取り巻く垣を築かれた。頂上の2本の槻の木のひとつ高殿（観）を建てて名付けて両槻宮と言った。また天宮とも言った。」（日本書紀(下)全現代語訳、宇治谷孟訳、1988年）と記されている。天宮とは天帝の住むところであり、高山の聖域を意味した。「観」とは「道教宮観」を意味し、道士の修行の場を意味する。斉明天皇はこの地を道教の聖地と位置付けた。

なお、宇治谷氏は場所を「多武峰」と訳したが、発掘の結果では現在の「多武峰」で無く、酒船石遺跡付近の可能性が高い。

5 まとめ

(1) 酒船遺跡建築の目的

書紀に於ける斉明天皇に評価は斉明四年に蘇我赤兄が有間皇子に語った、「①大きな倉を建てて民の財を集めた。」、「②長い用水路を造るために人夫と食料を浪費した。」、「③船に石を積み、岡を造ろうとした。」とし、有間皇子の決起を促したとする記事が有名である。赤兄の発言は有間皇子を騙す目的であったかもしれないが、当時の人々が感じていたことであろう。しかし、当時の朝鮮半島情勢を眺めると、前述のごとく全く無駄な行為であったとは言えない。

酒船石遺跡は現在のところ定説は無いが、京の西側の苑池遺構を含めた1つの遺跡として捉え、飛鳥池遺跡の一部で百済や新羅の要人の歓迎施設とする説が有力化しつつある。道教的な宗教心に基づいた行為ばかりでなく、苑池の飾りと考えた方がよい部分もあり、朝鮮半島での事例などを更に分析する必要があるだろう。例えば、韓国慶州の東宮の月池に亀形石と同様な物が存在し、推古二十年（612年）には百済から来た工人が宮殿の南庭に須弥山を造った記述が書紀にある。必ずしも道教に関係しない部分での構築も考えられる。

(2) 斉明天皇の朝鮮出兵

斉明期にはヤマトは親百済で新羅や高句麗とは敵対していたと考え勝ちであるが、書紀の記述を見る限り全方向外交を展開していた。しかし、660年に百済が滅ぶと百済支援のために派兵を決意し、661年に九州まで兵を進めたが、ここで斉明天皇は崩御して、同行していた中大兄皇子は柩と共にヤマトに戻る。

定説では「葬儀の後、九州に取って返した。」あるいは「弟の大海人皇子が陣頭指揮に立った。」とする説が有力であるが、証拠が希薄である。

そもそも、ヤマト軍が朝鮮半島に出兵したか否かは意見の分かれるところであり、出兵の根拠として額田王の次の歌が挙げられているが、熟田津（松山市の道後温泉付近）で額田王が現地で詠んだとすれば、出兵に際して女連れで出かけたことになり、太田皇女に至っては大伯（岡山県瀬戸市付近）で大来皇女を出産している。話を全て事実として良いのだろうか。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮も適ひぬ今は漕ぎ出でな

筆者はヤマト軍の出兵は無かったか、柩をヤマトまでの戻す期間が20日程度かかっていることから、斉明天皇没を機にヤマトに引き返したと考えている。このことは、その後の戦後賠償交渉の状況などからも推測される。

狂心の渠（たぶれごろのみぞ）

名古屋市 石田 泉城

舒明天皇十三年（641年）に舒明天皇は亡くなり、翌年の642年には皇后である宝皇女が皇極天皇として即位します。そして643年には実権を握っていた蘇我入鹿は、聖徳太子の子である山背大兄王を始めその夫人である春米女王（聖徳太子の子）など一族を自害に追い込み、上宮王家の血統が絶えてしまう上宮王家一族抹殺事件が起こります。さらには、この実権を握っていた蘇我入鹿・蝦夷の蘇我宗家が645年に滅亡します。

白雉五年（654年）に孝徳天皇が亡くなるまでの間に皇極天皇が行ったことは、雨乞いにより五日雨を降らせて九穀を実らせたこと、百済大寺と飛鳥板蓋宮の造営くらいでしょうか。そのほかに特筆すべき目立った動きはなく、どちらかといえば、巫女的な存在のようです。

ところが孝徳天皇の崩御後、655年に再び斉明天皇として皇位に即くと、62歳の身でありながら皇極紀と異なり、斉明天皇は積極的に土木工事を行なったように記されています。

たとえば、後飛鳥岡本宮やふたつきのみや両槻宮（あまつみや天宮）の造営や天香具山の西から石上山に至る運河と宮の東山の石垣の造成です。この運河は「狂心の渠」（以下、狂心渠）と呼ばれます。

（斉明天皇二年九月）時好興事、廼使水工穿渠自香山西至石上山、以舟二百隻載石上山石順流控引、於宮東山累石爲垣。時人謗曰、狂心渠。損費功夫三萬餘矣、費損造垣功夫七萬餘矣。宮材爛矣、山椒埋矣。

時に興事（工事）を好む。すぐに水工を使い渠を穿孔す。香山の西から石上山に至る。船二百隻を以て石上山の石を水の流れに順い引きよせて、宮の東山に石を累積し垣を為す。時の人は誹謗して曰く「たぶれごろのみぞ狂心渠。功夫を損し費すは三万人余り。垣を造る功夫を費やし損失させしは七万人余り。宮材は爛れ、山椒（山の頂上）は埋れたり。」

『日本書紀』（以下、書記とする）の記述を忠実に読むと、香山の西から石上山まで渠を作り、この渠を使って石上山の石を二百隻の船で運び、宮の東の山の石垣にしたと書かれています。

書記の狂心渠が築造された場所は、大和にあることを前提にして、香山は、かしはらし橿原市南浦町に位置する天香具山とし、その西から天理市布留町の石上神宮がある石上山まで北の方向に渠を掘り進め、その石上山から石材を切り出して、明日香村岡の飛鳥宮（岡田宮・板蓋宮）の東の山の石垣を造ったということになります。石垣は酒船石遺跡（いそかみじんぐう奈良県明日香村）とされます。ただ、垣をめぐらしたふたつきのみや両槻宮などの建造物は見つかっていません。

天理市近郊で採石される凝灰岩質細粒砂岩の切石を使った石垣が酒船石のある丘陵を取り巻くように中腹に700m以上発見され、書記の記述に合致するとされます。

近年、あすかにいますじんじや飛鳥坐神社の西側の東垣内遺跡・宮ノ下遺跡（奈良県明日香村）で水路の遺構が発見されたため、天香具山から石上山までの水路は現実的ではないとして、東垣内遺跡等の水路を狂心渠とする説が一般的になっています。しかし、この水路の遺構は天香具山より南にあることから書記の狂心渠の位置を示す記述と齟齬をきたすとともに、幅10m水深1.3mの浅い水路では石材を運ぶには心許ないと疑念が生じます。この水路は酒船石から北へ流れる水路であり飛鳥池工房の排水施設でもあるようです。

東垣内遺跡等の水路を狂心渠であるとする位置づけを除けば、香山を天香具山、石上山を石上神宮の山、宮を飛鳥の宮と見たてると、狂心渠にかかる大和説の位置関係は、次の図のとおり書記の記事に合致しているように思われます。



こうした大和説に対して、古田武彦は、斉明天皇と皇極天皇は別人で、斉明天皇は九州王朝の天子であると考えて、その大規模工事の内容と場所は、福岡県を中心に佐賀県から山口県にかけて築造された神籠石の山城群と太宰府を巡る水城であるという仮説を提唱しています。大宰府の大水城だけでなく太宰府を囲む三根や久留米などの土塁群も指すとしています。この古田説をさらに拡大して、正木裕は持統七年（693年）の「多武嶺」は、斉明二年（656年）の「田身嶺」の時代のこととみなし、有明海沿いの筑後から宮を移転して、大野城や神籠石、大水城など「大宰府を守る羅城」を造成したとされます。ただし香山や石上山などの位置については特定されていないようです。

古田説や正木説に対して、古賀達也は、福岡県うきは市浮羽町山北の丘陵頂上部に天の長者が作った「天の一朝堀」と呼ばれる巨大な渠を狂心渠と提唱されていますが、「天の一朝堀」の遺跡が現存せず石材運搬したとされる筑後川との関連が曖昧であり、また7世紀の時代に長者の呼称があったかとの疑念もあります。

また、邪馬壹國豊国説の福永晋三は、香春三ノ岳を香山、大阪山を石上山として「吹き出し」と呼ばれる石組みの地下水路を狂心渠とされますが、地下水路での石材運搬がどのようなものであるのか不明です。

いずれの北部九州説も皇極天皇と斉明天皇を別人として、斉明天皇は九州王朝の天子であるという前提のようです。2人の天皇の人格は、書記の記事を信ずれば異なっており別人の可能性はあります。もし、斉明天皇が九州王朝の天子であるとするならば、狂心渠を築造したときの宮である飛鳥の宮がどこにあったのか、また、香山、石上山、狂心渠の場所を示した上で飛鳥宮との位置が書記の記述と齟齬がないと示す必要があるでしょう。

古田武彦は、『壬申大乱』（ミネルヴァ書房、2012年）において、『明治前期全国村名小字調査書』第四卷（ゆまに書房、1987年）に福岡県小郡市井上に小字名「飛鳥」が明治時代には存在し、その後「飛鳥」に変わったとして、小郡市にも「飛鳥」があったと指摘されています。実は、この飛鳥の西に隣接して大保があります。「太宰府・大分・大保」の大保は、晋（265～420年）の天子を補佐する官職「太宰・太傅・太保」を反映していると思われます。小郡市の飛鳥には仲哀天皇と神功皇后にまつわる大保神社の御勢大霊石神社があり、後代に神功皇后に収斂されてしまった斉明天皇の宮があったのかもしれない。

しかし、狂心渠が大和ではなく九州にあったとするこれらの北部九州説の展開には、まだまだ問題が多く、論拠が不十分であると思います。

松野連姫氏系図の信憑性

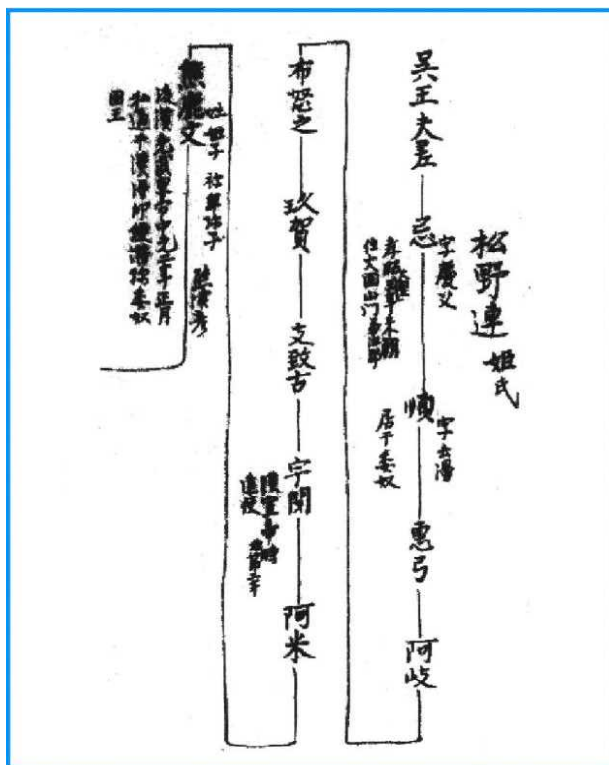
東海市 大島 秀雄

国会図書館が所蔵する松野連姫氏系図は、明治時代の系図研究家であった鈴木真年が収集した系図であると言われており、呉王夫差を初代とし、その末裔に『日本書紀』の景行天皇の熊襲討伐の段に登場する厚鹿文、迩鹿文、市乾鹿文、市鹿文が記述され、さらに『魏志』倭人伝に登場する伊馨耆が記載されると共に、倭の五王（讃、珍、済、興、武）が登場するという古代史上の有名人のオンパレードの様相を呈しており、とても史実とは思えません。

本系図の大筋としては、呉王夫差の末裔が渡来して熊鹿文が委奴国王を僭称し、そして熊襲の有力者から、さらに倭の五王を経て金刺宮（欽明天皇か）の治世に降伏し、筑後国夜須の評督となり、その後は京に上り園池司などの下級官人になったというもので、知り得る情報に想像を加えて系図にしてみたという感じは否めません。

ネット上では本系図について肯定的な立場から考察したものが多いのですが、系図というものは源泉資料として自家の古文書から作成されるべきものであり、そのような意味でも本系図は評価に値するものではありません。

結論として、本系図の前半部分は下級官人であった松野氏が作成した系図ではなくて、鈴木真年が創作した偽系図であることが容易に想像されますので、残念ながらこの系図によって古代史を語ることは出来ないと考えます。



松野連姫氏系図の冒頭部分（国会図書館蔵）

前回の例会の内容

■ 齊明天皇の出自と天武天皇

一宮市 畑田寿一

妃の年齢から考察すると、天武天皇は天皇家との繋がりを強固にするために4名の妃を迎えたと思われるが、そのことから逆に天武の出自が疑われる。

■ 中継ぎの女帝たち 名古屋市 石田泉城

『日本書紀』の記述を信ずれば、古代日本の女帝は、蘇我・藤原の権力闘争で生じた例外である可能性が高いと考える。

■ 丸窓付き土器の用途 一宮市 畑田寿一

丸窓付土器は、様々な説がある中で死者と天界を結びつける孔をもつ土器とも考えられる。

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。事前の参加連絡不要。例会で発表の場合は資料20部を用意ください。

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿（編集担当：石田）

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 2月26日(金)

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 2月14日(日)13時半～(第1集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
 - (1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
 - (2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
 - (3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
 - (4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
 - (5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会

3月14日：第1集会室